[illegible]

へ 5
2232

一　絵はしよもんの事のうちにも[illegible]
相傳ありて[illegible]あらはしかたし[illegible]
ところなし。書にしるし。たとへは
座するの師に寄して其道のおもひ
やすしと定情しんにそのゆゑをく
何しからす化粧物のうへにうつすへき畫
物しんやらしむ。寫紙に師の進書
やうてあらん人○一書[illegible]に
寫ものと出たされ[illegible]
傳の[illegible]

[illegible]文庫

へ5
2232
明治四十一年四月 日
藤野漸氏寄贈

鞠はむかしより事のつ紀も
相傳なくして只志をあらそむ事
なかるべし。書に定しるとあき
らかなる師に学し其道乃おもひ
をしらば覚悟しんよりあき縁に伝へ
伝しべき紀弟物乃上に何でもあれ當
何もんやむかしよ宗祇法師の遺書
かくておる人一書紙面を秘し。
家外を出ざりしと而世の人なるに
此乃秘をくべれまもあしぞ又あき

くし候へにみえずこれにもおしべからずは
一旦は奥儀に云傳へざらしみえぬる說に
世をふりて人の心もさまざま離に
傳りおもふこともなるをしてあらそ
ぎられなば誹諧乃本意をとりうしなひと。
難しき事にわしきやされども誹書
秘書べき物とくるしからず候ひて此段
とかば世のなかむりもむかしの月光
は浮雲の影ひさしくおほひ。梓に
鏤め世人にみえ易しあまねくひろく寄

一隠氏よりあらはす所也。後見む人へこふ
おろそかにてこずかしく。信ぜず謗し。
まことに仏儒乃教経をもかへず
てやすく詞をかりて志るまあらむかと
いふばかりによくいたし故よみ侍
道とは誹諧乃ことばにかゝる也。干時延寶
六稔夏南畔乃旅宿。自鳴子一無軒
ましてや筆紙をとる手也

祕中抄上 目録　宗祇撰

元日りやの盃
吉野乃国栖人
妻り救らる事
卯杖乃事
家賊乃事
四季の花鳥
四鳥八りしそ

緑乃花の事
八重桜の事
左近乃桜　右近の桜
芳野乃桜田　栗
鷺乃草葢
江戸式梅菓
巳日乃　祓
江戸風祭　御祓

江戸乃移舟
燕乃文　猿の文
青葉乃なかれ　白星
扇之絵の事
雛戸祭の事
流之猿の事
競将乃事
花乃君の事

氷室乃御調
七夕祭　千の名種
七姫乃名　七種
宇治乃花園　まそ乃の系
難波乃御綾　くゝの雨綾
秋乃更衣
住吉乃忘草　忘草よ
住吉乃菊　同異名

菊乃花錦
香稗の庭見る
きてゆふ車
宇治乃まそりの
同き海し草
四季乃ふちえ海
四くさうけ祭
明石の名船　きうの松

初中初才一

元日りやの盃

○元日りやのさかづきとハ正月一日禁中にて
のさかづき也くやふかく盃を給はりまくハるを
さかづきたまふるといふ也のむでたきやの
盃といふ也

吉野の国栖人

○よし野の国栖人といふハ吉野の国栖の者にて
えし大臣のつとめに諸国よりよし野の者ども
まうでまいる御調物をそなへ人のし奉る也。

藤野潔氏遺贈記

海乃家のうけとり
うま船乃事

九州筑後あたりまいりたるところにゆかりある
尋し人つとに其栖人とは申し。腹赤魚なり。
ちくご乃国。沖洲乃出處よりあまびと乃
わたりてそなへし日よりおしてまいる勢
しほより乃河より君いまさ勢給ひ乃れぞ。
本乃まゝなる紀出ぐ魚とふことなりぬ。今も
らし。野ふ。腹赤はわかなれん

毒乃枝といふ事

○むめの枝うふとしふてはる正月七日なる
かしあらもろ乃ぐらん一面へれとるを申て。

正月七日にまつるこもりの梅乃枝よりよ
かりくへぞふしくれし白のまつりしりちるこ。
毒乃枝よりくはなるゝことをかざしける。
まひかふく飛鳥姫をましらするよむかゞえん
うふことはけ留し毒ぐえることの梅物り
ひらまり飛るゝふる。葉乃名之飛る女姫
かくて大内におふまひ姫や

卯杖乃事

○うはえよりふるとぞも正月七日之。大内に。
若菜はうでいたてし時はしく杖よ卯杖

とはいふなりけれ卯つえとハ卯のゑん
むらひなり。桂乃えだ柳乃えだ松乃枝
これこのえだをば君によそへてまつる也。
されば若葉の御調なども云るに御杖
つけ侍し

衣賦乃事

○きぬくばりといふハ正月朔日に位によりて。
小袖を大内よりくだし給ひしが色を絹(キヌ)ば
なる中にもされば色を源氏にひかれるは。
紫(ムラサキ)の上のこれうつる乃ちよにぞきらるる

むらさきのうへのはいつもおなじの小袖也。
遣はされしにや。其ふしぎなりて源氏よ
りて。むらさきの小袖ぞとまいらせられけるほ
そのきぬ気にかけて恨(ウラミ)なげくに給の
うへ。色ハ源氏の君のもし給ひし御召の間おそ
ぢしき給ひものあつかひとぞいふに紫のうへ
色乃紛給ひでおほ内に給合のおほらし時。
たゞめでたき出し給へば姫の源氏しらる
三まへ侍らるぐは。によろおとして給ると。
源給へしよ。入り給ひて。侍らるがめでたし。

琴など。ひきなして。琴と。枕によく拆しなば。
琵琶鳴しめて。この根にかはらん
四季の花なる
○春ハ。梅に鶯なる　夏ハ。卯花に時鳥。秋ハ。
菊に鶉。冬ハ。雪の花にかなる
四鳥ハかしこ
○四鳥とハ。鳥によする時なるかなし。百千なるなく
ハかしことハ。須磨の浦の秋かなしさ。石。雲井の
根。二見の浦の秋かしこハ。松しまの藻の
岩かねかうてうき岩くぼの回り子。根。松の

野には女郎花おほく。本草にしるされば。と
えんのさくはおりしたるそても。千草に
神宮ハ。御信によそふるのか。もの天
下にわんとて。葉ひとりわすく海へ
あるむとくに基らに縁と
　おりふしてのたのしかるさは　内侍
物道しつむいふらふかなりぬるさ
縁乃花の事
○ところのはなとは。梅花かちよりて。その
てや。家ねよくも。[illegible]るなかくしるべ。

ちる山の花はちるともよし
こゝろは世のものならせ
まづ花の見ゆるかたへぞたちよりて川の花の色
めぐみ咲ゆくてふや

万葉
第一本の花乃見まくほしけれ
郭公の声は名のりきく

八重桜乃事

○八重桜といふはむかし聖武天皇ば御宇の
ころ奈良の都にして御かへし給ひけるに
山より八重桜をたてまつらせ給ひて御

門光明皇后の御作に
日をまちてこそ咲れ山桜
いさゝか見るにや今こそあれ
由緒いでけるに歌を詠ぜさせ給ふ
やさしかりければ咲さくらのおもしろきかん付せ
まつりごとおりひつけ給ひておほされば
其時皇后さのさおぼしめさるゝとかく
よろこばせ給へば枝をおりて帰りて
御方へ給ひむやこそなれば皇后はよしとて
めしよかりちらおもかしくてかの家なり。

うへさ物語に嵯峨御代よりしておほよ語く
新語ありけるとぞきこえば一條院の御時
八重ざくらをならのみやこより奉りけるを中宮
御前にて其花を題にて歌よめとおほせられ
ければ

詞花　いにしへの奈良の都の八重桜
　　けふ九重ににほひぬるかな　　伊勢大輔

左近の桜　右近の橘

○左近のさくらは内裏紫宸殿の
南の階のさくらをいへり。右は橘なり。

桓武天皇都をうつし給ふ御時植させられ
し梅の枯れたるをかはりに仁明天
皇桜をうつしうゑらる。左近の桜は
是也。都うつし給ひし時より右近の橘は
秦の河勝の宅にありしとなん

吉野の桜田　梁

○よし野のさくら田といふは其の梅にあらず
なし。三月桂田の名なれどさくらのみ桜
かりなければ桜田とされば植ぐし
植ざくらなどありて花のさかりを穂には咲く。

かうでたらふかはたらきのかたらひきこえ
三芳野の山たかくらり鳴竜よ
万葉 あそしの吉野川を掛りては

鶯乃かひご

○鶯のかひごぐさはむかしよりとなへ来乃むしろどをの
の枝にあそしれてく思ひどのかひごくさく思ひは
時鳥のまかけし鶯と時なるとはれ声く
中をまちふてありて鶯は鳴るよひくれさ。
志のふ絶時なるはりどの後とかて吉野山の
かひご絶たけてたつきかくて時なるはりどの
まなけのかひこをとりてらうてかひご也
いふるぞまなけ乃君もなくらくかいぞ。
つけ置し

万葉 志のぶとも事は絶しな時鳥
鶯のかひご立かへりし

汐戸の卯菊

○汐戸乃うた卯菊ことは付たるとて御手
中納言乃御時須戸九野山の梅と菊と
とらへ給ひけるや御手は源氏かざされよ。
汐戸九浦まてかれてたれも給ひ乃人給ふ御

年もこそあかれしと江戸に住ならへて梅かゝ。
菓子江戸よつくるは行年の時にきくへきさまは。
江戸に毒菓つくりて源氏よりこそなれの
歩合や

春くれは江戸の山里鳴して　行年
都に浪して毒々香夜
千里も見をそしらむ秋海よ
菓摘くるゝ江戸の浦人　同

江戸の鶯特見も行年もれたる海の野山
かくれ鶯鴨なとうかしへ江戸の鶯かなる

秋に見鶯特のゆくへ鳥は鶯特江戸
よ侍くることをおそふて

巳日乃被

○巳の日れちくつゝ三月三日は禁中よくの
ことくそく状らう乃くて思ふよおひき夜
ふてく乃条々式日ハ丹波の永宝山より。
くろふそ殺ふうたく

江戸風条　清被

○江戸の風条は素く源氏和よつ三月半
よ江戸まて風よ花のちるをおつれよせ吉

て風を參らすべきかば風さいわうて候。
世に瀬戸かくれなき源氏のまし候ひて。
古江敷と申は瀬戸の總に風祭古江敷
つげべし瀬戸の浦稜是も書く源氏
のしるし三月廿日に此稜としるす瀬戸
乃ちくへしもの也

瀬戸乃稜舟

○世に國乃らいれん舟とらえるゝは源氏部
よりは淀川の舟かりめされ瀬戸の浦より
繪ひろまに繹淡路の舟を出されるゝや。

此名を海のさくらやれは玉くしのはなみる
どくへなぐるま給ふ時大臣かぞうおりもせぬ旅
乃山路おりかひ浦路をまふくぶる繪
まえん思神あまだのやうかすりのどゞふる主
侍くておしぞれびまや彼給ひとおまそろ
乃まるぐとふやへ此いそれはや源氏瀬戸の
浦下乃時舟よ技給をおそて給ひし。
世の成みぐくらしへは書へし三月廿九日
世乃舟ば繪ふろ浜よりは繪
瀬戸の舟よとのまかくし

懸乃文　猿の文

○はしあ代りとつへむかし家鶏ハ桃なる
ちのうらしく唐乃王より日本乃西王へはは
ちるさよ文りうの花紙へふきむすびつゝ
ねぞうらしく是をつゞあ代りのいぶあく候とも
ゆく是別紙前皇の御代の時へは神ぞ
めくど書きるしゆふうるそとあそびうると
みすらざれば文の先とふるよおぼどかうと
はうるへきそ猿の文とふも首きをけん
といひし仙人のうへ猿の縁は是なし
てゝおう是を本の葉の文にもつふさうの縁
とはうるそ称し紀てゝや

喜葉乃きうれ先うる孫

○あれそれまされ乃かとは大内より宮月
一日前乃ことよ明るろ柳とて二本あり桐紙を。
生さるよ喜葉乃きされとうけ絵ひて毎月の
嘉よどうと絵ふとくへ書とそされ夏柳と切
乃事へきてうき絵へ夜発へ云とんは
四月一日よりおうさの夜とさ絵へ
是とまつさ称ともみへ夜へてもなし

あやめぐさを結事

〇五月一日より古用あるなく君に献し
人々もあやめぐさを結かけあり

続戸まつりて

〇ちまきまつるは五月午の日是ちまきは昔
楚の汨羅の淵といふ所に屈原(アナツヒ)といひし人ありしが
南方にのがれて身をしづめし村人が其日の神
まつりて粽をつくりて飛漂(サン)懺悔(ケ)をせんが
為に神の方便にくむ粽の数つらねて
まちかくつくりて粽をまつりし

古粽はひとつきちまきを中よのころ
かくねやうしたるといふ

おなじく続戸の糸は五色なり
いにしへ粽の数いろくにて　賢瑶

薬を採る事

〇くすりを採るとは薬といふを採りて
いたく唐には五月五日に薬を採りける
是のちちをはらひむかしやくまつりしおり
そのうし家納にはまうくべし

薬狩の事

これをひらくことは五月五日に菖蒲の節に代
とりて菖蒲にまじへて掛物とし

君が為狭山にさしきひろひよ
ちよくいくせの菜をつみつゝ

花乃君の事

○花乃君とは桔梗をいふなり。源氏物語
東屋の巻の時。三河の八幡にて夜になりて
に前乃桔梗が咲乱れて居も侘なく
けるば叶桔梗を花の君と作りて前の頌
をよみ給ふ

都わたり来る東路の
花乃君まちて一枝折るかな　業平

氷室乃御調

○氷室の御調は六月一日に帝に奉らし
めたまふなり。富士より氷をたてまつるの
里より延喜乃帝にたてまつる丹波の桂田
山よりぞたてまつるきし。富士より氷の寄
合せびむろ山とも。権業つけらし

氷室るいまださむさの湖あれ
桜田乃山氷きりたちてやまく

七夕祭　星の名称

○七夕ハおほやけの儀式のことにて禁中にてハ
瓦の盥に水を汲入て庭に鏡一つ
をならべて其うつりに梶の葉に詩歌をかきて星
に薫物をたき手向給ふとかや七夕に供ゆる
ものハ薫物なれハ星にかをりを手向るといふ
乃ちなどの百子池といふ事は此比
此事の事くハしく七夕の事ハくハしく
りのこゝろをつくして織女もらし
とぞいへるまた牽牛のなるべし　星の名

稗とハ七夕ハ織女の裳裾と七月七日に毎
年にかゝりて牽牛と天の川を渡りてあふ
ゆゑ牽車をかうといふなりといへり
なかゞゝしくて天の川を渡るなり
牽と車や七夕のりの
七姫乃名　七種
○七夕にわたるこの名あり
ささがに姫　薫姫　百子姫　秋さり姫
織姫　梶葉姫　槿姫
是をもつて七姫といへり又梶の七枚に書も

かりは花もと結びて七種ともよそれハ若菜の花也
またハ秋の七種とよまれバ別て七の草をりとも
とるは用ゐくなれば手向にも是七種と桔梗の
七種ハ
あさがほ　萩　女郎花　尾花
ふぢ　なでしこ　くず

宇治乃花園　まくずの原

○宇治乃花園といふは源氏の古歌に
くさ七夕のまつりの為に秋の草花とて
猶へ植ゑて七夕にまゐらせけるといへる

○宇治の花ぞのへとも花合ともいふ花ばかり
ともいふべき秋くさをきて秋の草花也七夕
手向の為に作ると云事也七夕祭
七夕ハ二星の前にかけてよろこぶ

おりひめはまちかね気にて待ちけれ
ふみそ結ね星合乃そら

難波乃御祓　よるの御祓

○難波乃御祓といふハ源氏にほのかなる難波に
月乃秋ハ引はひて名月の夜の御祓しけり
それよりや住吉ハ難波乃秋難波の月といふ

右は、出穀たゝへつるうは、此秋の後へ詠だる月
に、新穀乃初穂つけざりし、秋くおくりての
初穂見も秋く深氏江戸より都へ上りて住ひ
て後つくの里に住ひたりしや、七月七日
盆の時、家労とて、さきの縫ひて家のつとき
こくどふへ縫ひつりつくの初穂七月七日也。
七夕ふりつくの出穀とものくへともつけ由し。
秋く

秋乃夕夜

○秋の夕夜とうふ、九月一日乃夕すくなきこと人なり。秋合(アヒ)して出夜にひくと年て出縫に見と
秋の夜の夕とよびし

住吉乃忌草

○住吉の忌草乃こと、住吉にて御事とよ
とえてもさぞんちしもの事は萱草(クハンサウ)とよぶも
その見と振れぱうきつしかまりしも忌草
は紫苑(シヲン)といふとおもふ事と鬼の志つこ事
ともそつむしろうしあるき、親死てたつるう
後ともおぼつく親をて常に、親の墓(ハカ)にまゐ
りけれは、おやをおもふてその物そろくと親を

忌筆を捷らざ半月の花の下ままりぞこと
てきぬふ筆をとくてかれ半月の曲猶ざしは
三なはおもずてゝやぞきめてあてら墓つもまま
いふぬまに半月一人まつるにて墓乃あちよ
つき一晩出ぐ此ぞ後決守れんとらふきるに
ありて晩乃まつこ筆もむしつめこ崇祥
ま守ぞくうしの行筆ありて物おりひ故ふ
なと忌ものとへぞ捷らし見とおしてはへ。
形相俗ありと
　　ときれ出ありて海付れと

菊花
　君のちとせをうつしまちなきと
　　住吉乃菊
○是ハこうしよ菊とよむなり。住吉のはまに
ありくおりひよ松の木々あるを見た人。
五位の者のかたへうちにて松の根
とるを扇を結びて菊をかざして歌と
よむ
　　住吉の岸に生ひける菊の花
　　　前乃花も花もさくらん
　一陽にて菊の花咲けるなれと

信州松代　菊の海まよひありしの浜　崇半

同意

○秋の花　花乃中　山路の菊　秋寒

此類多し

菊草は若葉よりの花盛まで

色深き香さへしも記秋の花かも

秋くれて折ひらけるたち山路

花乃中よりも獨咲ゆかしき

濃ちる字の若葉も枝まで

泥おしろく菊の花かな

菊の着綿

○菊のきせわたとは七月一日より菊にわたを

たとへきせて九月九日に取をさせくだされ、

ばしまのへんの是は菊のつゆや泥綿にうつる

ふでと別によわらんの花をかしくきやんがなる也

秋路より九月にかゝるわれけん

菊のきせわたとぞ詠む

黍稗乃花る

○きひの花るは九月に大黍の実ありて候

ふとつのあるまじ上男をもちつうしらん

さしもまうけたまひしやんごとなきりてかしも
なくてこの葉もなかりけり。そのまゝをばおもひなる
きびすでに後物なしげなるのかはきびの
後とりてかしまいりておもふあたらしうて。
けふさかりなく見をさきびの名なるとなりけ
中にあるまうけ乃君たちにうける事にけし。
彼はきびの名なるはしるまれになりにてかし
りのく
さてゆく事
○さてゆく秋のてやいかなるまゝ閉まりかな

ど山里よりうつるものこゝろ
宇治乃かすみの
○宇治のかすみのみさ源氏の乃かの姫君
ましまして世に乃宮ともて宇治にまかりて八
入らぐなき状あひし給ひて後思ひかく
あはれ入給ひけるに思ひしと源氏の御かた
よめ世との宮て。彼物なと源氏のあるらん。
此文もまどりのをもりてとおそばし
それば状とは思ひしかされぞして。
名でりのとわ。何でもとてはやなんとは海す

よあるそれば廿三の宮らしひりうきやさ
きばかしひきとするなたでりの花つくし
まこと宇治の里よそれの内ところ紬の下。
秋の下たびらるよ移ともなそでのしも
せぬべきことらしひの小松の草よもしふし
なみしさればまつの小松草のまいけぢらし云
句みなそでりのつけべし

梅と云題のうちに起るなるとの
是は花わしん手まつの小野

目出度し草の

○めで度し草の乃てよろしきは何事にもあらん
ともがらは。風。浪。水。煙。花。月。紅葉などは
さびしきてよき事とも見るべしめで度
しるをもつてひとつの事をもつて其の
うつして嵐と時雨と

さそふ名残の時のまよる御堂よ
めで度しるの花山あしらき　作者

四季乃よろこび度

○春ハ蘭(ラン)　夏ハ蕙(ケイ)　秋ハ菊　冬ハ蓀(ソン)
是を四季のうちかへ度とはいふべし

四ところ付条

〇四ところ付まつりとハ。紫宸殿の四方の御門に。
座あるをとりていへり。此座あるがことくまうけき
時ハけいこなかはさまりて。北南東西に侍るハ祇園
乃中より出て仕付て相殿ハ廊下なかれさる也。
南殿よりいでらるハ。朝の四方を仕付て清所。
立田へむかふくらして。さてを付るがよくする文付
あるしいふかく
　おなし段の文付けるにいひてそ
　まる所未をよろしくもいふ

明石の君船さうしの事

〇あかしの君事よりて。源氏須磨なお明石へ
うつりおはひて一と。わかりしより住へき给
に。源氏の大将おほ時おまへ々ては作われ
そろはんなはのあるする。船よつきしかぞ同
ほて見送網ゑてとる時ぞ見てそおどろ
くしてよりれはこま時とおかれ船とし
つけおひかろ。網ゑて見をとらさてまん
船つけべし。源氏の前合へぎまくけ浦に
まるしの事くいふあるき。ちいハ人唐の浦

扇の塚のさくらに橋し出城出づるしの者
上はらひ侍くなり

　背合せ居るさゝ神の月
　出るしの出城風のゆるや

海の余波乃事　なりし

○うへ氏娘と度々への上る余波そてハなり海の
おりそのなりさがれてひさうぶなるなる橋かるを。
源氏よ海六人あらく海の余波とらくてあるよ。
あれやう無なしらるよ余波つけ登し
　須磨の浦の月のかゝりて見ぬ秋

　海乃ふかきもひきあらねよ

車船の事

○車船とハふてハ浦の木。大田の浦浮まその
こゝくけのつくの浦浮ハ。無座の給のなく。
彼浦浮をぞろくしとおぞきめぐりぎまとこぞ
まりの船なれバ車船といふ也
　めぐりき梶つくの浦浮の車船
　ゆきしき旅の日数かなして

襷掛三目録　宗祇撰

うや作　[illegible]
二たつ理乃宮
おそハ乃神
太常　きぬ常　白き常
日本乃東名　[illegible]
冨士山乃名　[illegible]
まつの常　[illegible]

[illegible]

神楽抄巻二目録　宗祇撰

くや作　[illegible]峰之池
二ちり乃宮
あそハ乃神
大幣　青和幣　白和幣
日本乃異名　浦〻名所
冨士山乃名　蓬ヶ嶋
まつり舞　大和舞

早稲田大學圖書

一
おりくちまつり
志みつ楷ゟ衣のきぬと切 歌よむ事
そしまえ
形見乃水　命乃ある心の水
汐水よりそうくこと
東琴今の事
小狩乃一夜松 またにしゑ わすれしのさけ
都鳥乃事

二
薫香乃事
若葉鳥の事
あけの星鳥の事
杜津雲乃事
錦島の事
こゝふみ綺の事
三乃燈の事
淀乃志ゝの事

初瀬の海士小舩
初瀬ありし 初瀬女
津ゝ祢結の事
万葉乃箱
千鳥の翔ニ汀乃つまゝ雨ともなと云事
鴨大臣 暁の鴫のはねかき 百羽書のこと
積乃花のこと
烏羽玉乃事

李経乃事
小夜中のこと
めのとゝ云事
甲斐ちりと云こと
当世乃女 八千乃稀
うゐ風 七夕郷

秘中抄巻之二

かゞや姫つまの池

○かゞや姫とは天照太神宮の御事也伊弉諾伊弉冊と申は神明の父母也其時の御姫とかゞや姫とは申也又契りをむすぶるよかゞや姫とは夫婦やかゞや姫とも名づけ申しつまの池とは伊弉諾宮の御代池也

御神詠
月と日と見えつれば妻の池の水
濁もきえ申は影ぞすましと志れ

是一切衆生の悪業煩悩の濁るこころを

此池にておほく清くみそぎし玉ひける故也。
さるによりて此池は常住わかすといへり

二ばしら乃宮

○二ばしらの宮とは伊弉諾伊弉冊の御事なれば此
宮に二柱とて二座まで祭られ給ひしは二神を
中にさだめ成べき思ひ子とてかの御婦人此
ちぎり給ひしとこそ中にも男子一人女子一人て
も中でらるゝ事がおほく二ばしらとのかよひ御祓
乃御柱にておほくみそぎし御神御祓の
ゆへにて出来ける秘事也べし

あまいの神

○あまいの神とはあら海の神ともいふなり　いこと
いふともいふは海の神をまつる時の御祓といふ。
ものゝかくれ迄しまうらなど人旅にたつ時の
祈念なし

庭中にて風雨神のきよめにも是
朝夕に昼夜に陽くるまでに

大幣　青和幣　白和幣

○大幣とはつなぐ棒に麻の苧をとりのくつけ
ころもにつくおれらきのきよとふる物也。

それしら川くろかみ山とよみくらささやまか
て。作物語にも。おほやけの引手わきまへ
みそかのもつはら。ひ。路よりおのつからさ
てん物かとも。らりまさき春秋都。西都
とは。青は春。春よりたゝいた。白は秋よりたる。
二季の名には。用ゆ。都とかなさるとも云
は。右の手にそへて。まゐらするよしさてと
いふこと。ありし。五音相通なれば
日本乃異名　つくしの山
○詞乃山　やまとの山　しきしまの山　あきつしまの山

おのころじま　同　あしはらの山　同　ちるひらの山
はちるひらのやまとも
まこと。あの山が北の方へさるの滝にも
いふさきが中の人の住ざるしきに成て
ほくにやるそでに住ざるも乞。九千の山
ありかへしあるしもこの方へて後世本
乃内みちのくの出羽の国へとも流さるらん
富士山の名
○うくもの山　志ほあるの山　浅間山　三重山
根なし山　同　ちりの山　鏡の山　東山

比叡山　おとわ山　かげとりやま
とかの子山　鞍馬山　ともに十ヶ
寺の号なり。比叡の竹生嶋　琵琶の湖さ
鐵紫志賀の嶋　是をして八景の諸寺
新宮く

すゞ筆　やまと筆

○すゞ筆とはむかしは福の浦。
うぢの濱とて河にておまへ様のしてより
うつしのにうつしき女人来りて宿と
かちぬ経みぢうかゞ佳あまてんぱうと申され
としおいて宿をかりまゐらせゞもくもと
申ければ案内してゆるせば女人ばおまへの
家に月日を送りまゐらせ候まゝ婦人にあるま
るとしりなさば女人志ぞんの一日一夜にて
五十年が経をひそかに書写の徳にあつかり
嵩もかくおひしくや彼人おまへへ向るを
乃至法のよ月本まて二てひちまるか是弘法大師あ
つろゆ人ゆるし帰りおみて今は筆さまでと
はしまつまるより先経ひろむおまへ人の氏
おしてわ遊いろそまうくふ私も都しかりき

婦人とはよくいひならはしてちな筆を
まひて聴かんとせんとて筆をもちて。是非
あるが筆をとらしめて去詩よ。此女人は。
うけ給ふくまなくいはれしも。独楽わるて。
目なきよう殺生し弱ひてかくかくとあるを。
是王人の女裏に行くところの為には王臣に
てこゝろふかくましくともいへる物なくや
物なるのこ物にはれしも皆行くところの為つ
けれし。是ふての本説に嬉しのみに因り
は王人の依家に富貴にてたしめおこ氏

神祇つくるには人の信仰にふかくまことあれど
ぞ成ることなりとも。藤河筆のごとく。三種
乃浦乃うらうらぞ成ることかなみに。出しめ
まひしかなよ。前後よんだぞ成るとみるとは
きよくまことやまし筆とりかつ。古内よ歌
を添してまふされば。古和筆ともかく
おもはざらんや
○おもはざるとこそ。つれむしん膳東下
つるの時。藤石よ。おもはざることとしてる
めされたるゆへに。是藤くされば。まことなしと

しるべし

むかし誰の松をまちあるの中なる哉

こゝに忘れぬ人の心かなと

志賀の樒　うちとけのまくらとなるらん　歌よむなり

○志賀の都のこと。是は天智天皇の
ひめ人の娘。おく志賀の都に住給ひしが
にはのつくりきえありて礎として
帝くなり給ひ。其後のえよりて志賀の
都ありしはいつの昔日のうちの草の
あれし故の歌りしかのなどしらと切て歌と
まであそらしてば上代よりこのかたまで男女の
契りに常とやらんおりしと思ひつゝけば常
なさしらんまことおもひておのつからば常と
そがめうらて殺おつてしておりつゝは其数と
後びてかしりて是業平もはかさしらず。
上代より男女の契をおもひてかる故乃
まろしとさるくの常のやうよつぎてば歌
をやるなるべし

そしなれ

○室のまさしらあるはむかし業平と云ふ人。

家妻なきは、ひとりやもめにして、我の
みにても、月日を過て、さる風情と見るにつけ
おりの時、此女性そのわかれんとて、硯
乃紙の墨をすりて、なくなく筆をとりて書
しるしたまひのが、いまだそらになりて、涙こぼる
見る物ことに、思ひいでぬることなれば、此ゆへに、
そのわかれとなるに、硯の紙をとりてかく

家まちつれなき人を見て恨むも
人によるよるる親のいへしとに

硯見ん乃紙今の心のうち

○ここに此わかれのなげきして、たまひし親る、
まつて縁ひ親く、下向し縁つけしけるに
不思議なる女人のあひ給ひけるが見けるに
いかにしても中事、お縁なき葉も、なげきの女人
や業平なまけ、玄宗給ひのてよいみける人
みくがまじきそぐしに山路によりて、かへる
都にかんとて、縁ひかれば、情女人作る
は、家親のりのそふてぞなかくしに往
りのきなつくしまの日出門にまかりて、下
向しかなしさて、まことにとをくして、なる

人はともあれ。わがみはゆるぎなくおもはし
くもつれてせんの内つきあらんにはよ。あはをも
つきまつり男もとよりさうらよ。業平作れば
女人家よ心をかけて。作らうとらかれし
くらも。人間そてなし。男の信をそはや。
きよひつきまつりけようやて男のえで
こゝろとる縁ふかく紀わかくようてりし給ひ
まうせ人はさうるなうめ。見まで家居うは
前世の契りまてもやはらんさうしたか給
をきられぞ。なまよ床つき給へしてよ

ならぬ事をよくこそ。ひとりてまことに給
ひのてはあはゞ間えてはかをかけて
なよそしぞつきあふて。男の身の亦く。今も
ほかくしも。今代は柳え給ふて。業平
くらが化粧の人にいをとりて所くまなほ。
なとたるくと給ふは。おのれの身なる。
内裏よ入給ひうさざるにはなることなれ
思儀よもおりひ給ひうれば。当時女はひかる。
見しくられしも作家よくは。物いふぞひそ
くふ。おつきぞしうきくが欲へ。男たるさ

契をむすびしうへはいつまでも末のびはなれてはお
つとめれはおもふ心もみだれてなみだ
にひてや夜ちぎりしをなげきてひかりも
あけがたくて此まへの室にまうでさせば
貴布袮の明神は本地毘沙門の化身にてまし
ますゆへ契りはひきさかれてけるを
貴布袮神人のあつまる事も此事
にもとあかしけるに神人のむつ
び此契なきはひきさかれける神の
御神まくはなれて

世をうらみ別のなげきを神にかけ　業平
つらきの手枕にかはりけり
引
まこと命なりけり袖のなみだかはくひまの
命なりけりつらからぬさまにしのびて
いふて
いはでもつらきおもひかなしけれ
命のかぎりかれひきかへさん
引
まことのおもひまいらせてこひしきの心と
なりにけるそうらみて
陰陽師陰陽すくはひ業行

人の心のあさましさ
いかにもよからずと
○いかにもよりてくといへむかし聖武天皇
乃御時に我朝の女ばかり恵ひたれば彼女
にやしくはあるに物をうさつけて見よぬれば
あまりて見る代々にさびんと云し
まことに男女のためにいひてあるに物をとひて
見れども殊にあらずして此男はむかし
く入おもしろくいろいろとある時の語に
さるとかく穢らはしき

是はつきはつき乃ことく

東琴乃事

○あづまの琴ふくにありしむかしは引ならし。
是もむかしひさく今はあつし鶯紘持て
かうのかさ絲からうどしてひさしく

小野乃一夜妻 あれり寺 あれいしのけ

○小野の一夜妻とはひそかに小野の天神は
おごれ引安楽ちようて。京よりゆきを大
神とさとて殺き乃がりてくきうちなら
きんと。目中の法師に祈り頼ひたるかり語ら

伊勢天照太神と。都になりぬる所に小松あり。
一夜のうちに千本の松を生ずと。様くまたび飛行て来
現如能見べし。移り飛ひけるにぞ見えし
ありて又一夜のうちに千本の松なといへる
ある所にて其瑞相ありてやがて神と
あがめ奉りて北野に移りてあまた一夜の松とは
枝ごとに千本の松生じけるに梅を相そへて見
給ひつゝ九百九十九本ありて今一本たらず
天神の御託宣によりて柳を一本くはへ
植ひろめてやがて其ところをまつられぬる

一夜の松ならびに柳つけたり。一夜の松
千本のことくあるといへまことに柳となりて鶴白
寺にて神ほどふるくおほしまれる
時宗清浄光寺にありて寺へ小松にありけるし
北野の寺小松にありて御代の清寺へ出
くちて此所に徒ひし御代の比松に
てかくなくへむかしの寺にそおひるとかや。
ふるひやうをさし給ひぬるに此ふりひかへを
柳はやうやくへ名を残すといふるになれば
寺につけくしなけるなしひそかにのこりけ

ぞしぎたつひはひしん。白の秋の内。
ふるき歌によみつけしはなれける。
らしまの名山寺などに出して多かり花
くのさかりをいはずもなし
五月雨やさて花にみる桜
東山寺の軒まで咲け
本にしのまだけといふ大宰のことし

都鳥乃事

○都鳥といふは角田川のこととなるはいはく
しきのかれいとて鳥代への浦よ

ては鶉となく。鶉はまでばかりなるとなく。
まくばかりに時なるとも云ふ。都鳥は。
師説なとくしく。其外めづらしくば作
らしき事なと業平の言葉にいはく
おつまで雲にきこゆる都鳥(眼字し)
さりしとて代なきもれ

鶯鳥乃事

○あすぞしらる鶯をいるるの大雪の太門に
あでしとれど橋に庭あるまでなでしこる
井までおそぶなるは鶯とぞ鶯なるしといふく。

言のたねはしかうしるとかく白きるともや
なまりざれしばりんさいふもぱ薫賊ふ行ふし
いふてとあるを
青ふ珍るや孫ふて丸の行

紅葉なるの事

○もみぢ葉どうまぢ席のてをく捶物よおちば
立田川は紅葉くかゝる紅葉なる
人志ほそうる神ひちよられ
衣もそゝ三室山の紅葉なる
めんしくかゝる立田川も

もげの海なるの事

○もげの海なるごうとばくるのてゝん
あだのあれの山よわたる見や
よしきららう海のもげの海なる

杜津雲の事

○杜津雲どだゝのこゝせかゝ杜津ねとるいふ
詠やふいなえ見との杜津もし
まろうよおとゝね拝つゝひとるよ

万葉

杜津たの室みとるゝ比ぶも
沙身うるよ志津よいゝなえゝえなれ

みしき鳥の事

○みしき鳥は一色なれど恋の中立ともいふ。
まこと御の鳥にもあらず人の身しき鳥とは。
恋ぞすり

うちかへる猿乃すり

○霜猿につゝきては是ハ大雪関の雪による
あり此山に猿あまたつけどもなかずすゞこそいふ
猿とは是なるもみての事なし

夜とうけてこゝろふ猿羽袖

三乃鐙の事

○三の鐙とは秋の野にあそんでぞ遊ぶ陸奥卿によ。
こゝろへの事ぞつまれるを後陸奥卿の御
歌に

手折むんの柳のいとそへて
うき世におもふ三乃鐙

淀のしぐれの事

○淀のしぐれとは川岸のとまびきの陸風にふる
きそふるしぐれ今の浪よりその海こも
草のぶかるれどしぐれともいふそれそれなし。
誰のふしぎは乃ごとし淀によりよりつけど

又一首　みても淀のつぎはしもまでし
きくれは淀の継はしこえるさへに
わたれる者世々絶ぬ有月夜
こゞれとはおもふにかられさることやかり毎に
淀の継はしふみぞつけゞし

福浦の海士小舩

○福浦の海士小舩とはつまはむかし福浦は
大海なりしやおほくの海士人住て福浦
あらそひおる時海士人沖に出てまでこぐまで
福とあるはなくともなく岸のこすまの

葉うきて　かれらは花とところに釈迦如来
乃葉に弟子みてうちまつるおひるのに
海士人悪魚議に捕りまりて舟とよせ
己舟なるところ釈迦一葉の舟に乃りおひ
それば氏は海士人と共に家にかへりて
その後福浦山に寺建つらして安置し
かりぞそれより此山仏世界とぞうけまちと氏
本願しまく福浦山のおくに寸木の葉の
宮腰にて神まもりて古葉とおかまへ人
勧請しておんめおまへきみば福浦の海士

小船とハ小舟の事也又一葉乃舟
つゝみ出るくされバ初瀬ハふりてたる世
界しとふし

かくらく乃初瀬の山にて月の
ころはけあらそ人の行衛

初瀬をとめ 初瀬女

○初瀬をとめといふハ泊瀬の御船をう
けたまハりし所の初めに初瀬の泊瀬にありし
て常のごとく仏神を祈りて初瀬にある
ときこそ度々あらひ初めてやされバ初瀬と

いふなりとそのまゝつけられバ出雲
乃二日づゝに初めに給ふれどもおなじ
乃船に中宮の御祈りしくされバ宇治に
中宮をとづけてあらく語るとうき乃
京をしんやまとに初瀬めといへどもこゝも初瀬
乃山家乃うちくる山々ときしめでは

ある初瀬め氏ありし氏の冗詞

万葉
柳のいとも縁をかけるき

つゝ初瀬の事

○はつ初をといへ尾花がるやすゞの花くゝ

人のみしらけてかくの白花とらへゆくとこは。
世のなからうきものへどらへて手にとれは。
夜くつ旅ころもの色きし

石葉乃霜

○石葉の霜といふ事は、ひえの山に紀伊な
じまりし時に、方法をおさめ給ひし
御名に入給ひて、白杉の山にうづみ給ふ
しるしにち日本無に紀伊能気しらるる。
是を石葉の紀にいふ。今は白杉の山に
あかずみる人まつといふべくまたしも

紀伊なれば石葉の名もいわれし

近江の国に汀のつきを田にあてゝ云事

○きらん湖の岸にくだるむとつきをきしめて田と
つくるをいふ。是としてつきの田とかける。
此田より人の作物の田から作物へきすれ
米つらしとしらぞ家の向人の作物へゆく
たらふ人うつらぞく作るた男にゆうらぞの東
きく今くし

万葉　湖やきの浦のつきた田は
ゆつくの東武語まうそのれ

鴫立沢　暁の袂のうち出百首出

○大国にすぎこしといふ人あり。俳諧に鴫大
臣とふ人あり。浪清くに庭郷にて空の比字に。
同処にいたり枝家には鴫の羽を字とせしを。
まことに武部にも鴫をとゞめし鴫立沢の跡に鴫
塚といふものにあらはし空のちからひ給へり。
西行も聖人ならてかんせる歌をつくりておかれ
てゆるぞ塚に鴫の羽を誌ひとらそへてつくらる
ところ其わかも鴫の名総にはいつ聖のことに
そうくせることを立まして衛（ジビツバ）御（カ）城日本を

乃後まで続きけしゆへ西行のよみつとお
ぼしめし、衛門御大家の南の構にて定生
乃数を書つけなりくしたるに終り
西行のわすれ庵居ところ扨ひしに前後
もよりぞ聞てきたる所御手とどらるべし。
られどおなし聞もおもひあてぞきのうたに
しるし侍りぬ。笑ふあとに暁の袂のうち出
西行出立とぞいふなり

月信　暁の鴫の羽音は日夜みえて
さくのとのやまに風をわすれて　佐々種

千載　さはしさや志ら風ふきかさつかく
百鈴もおなしまつ数むとくは　俊成

橘の花乃事

○う橘のさまよらうてきくは、ぶ鶴の花すいちすぎ盛花
あかつきみさく時は遠山きの橘花影へ
もぐらで冬咲ゆくなしわかのうふあれぱぶく
よるさかりすぎお果て山の霞影は

橘の花乃へださるよし

烏羽玉乃事

○うばたまとハ烏羽玉とて黒くむらしてぬ実なり

やとかゝるとてあくまでハ鶴の袖代ろく声と
おもて歌とてしまちゆめまぼろし
いとやめて家え時からぎの
歌の家跡としてこかゆるか

玉襷乃事

○玉襷とハ女の袖のこと也
新古今
落ちら花も袖かけて年さらまほしの
尾上の雲もしばしとまれ　家隆

たまゆらの事

○たまゆらとハ暫の事とみゆるぐるゝことゝいへ

げハ綿をおほひてその露にて身をのごへば老もなくかさ
なりたるよし見ゆ。けんしやうの事にて人の
くすりやうにも用ゆとかく千年をたもつよし見
よ薬しきうの名を手て菊の下にあけ
ば養に見るゝやうに紀行の継将る
あらぞ法をまあり

猪のこと云事

○めでたしといふ詞ハ神功皇后三韓の
征伐におもむき給ひて猪つかまつりて島しなひして
猪を射めして猪肉を向ひの所にくはへ給ふ

玄猪にありしよりてげきにとりこめて祝ひとして
表の名とあらはし祝儀として此ゆへに
入て招きていはふて家内の息災にいのりし
ならはせあとの女と乃ならひて猪をあげ
ならつて餅といふ事をはじめてめでたしと
物なりとして今は猪といふ事を祝ふ
乃玄猪ハ今の世にも此所の餅と男の
はじめいつれもとくやもの事といふ事
や飼料猪葉によろしめでたきと云詞の始也
めでたきといふなり

めつらしと君か[illegible]の[illegible]には
千載　[illegible]出るなりけり　資賢

甲子をはしめと云事

○甲子を[illegible]やはらと申も[illegible]のりくるやす貝とうらて[illegible]
[illegible]とりて時より[illegible]とは[illegible]
[illegible]ふ貝ところ[illegible]
[illegible]しと時貝[illegible]やすと云
[illegible]つる[illegible]事[illegible]貝[illegible]
[illegible]へ貝[illegible]

いひそめける行成の[illegible]

　　[illegible]世乃[illegible]　八千の声

○ところの[illegible]のことく[illegible]のまつ[illegible]
[illegible]浦[illegible]とつけてしところの[illegible]
[illegible]島の[illegible]とつけてし王津[illegible]
[illegible]八千[illegible]八千乃
[illegible]より[illegible]ひとつの[illegible]
[illegible]より[illegible]つけて[illegible]
[illegible]一[illegible]の[illegible]ひの

むかしよりするよしつけゞし。又こゝらの
むかし神代よりの神ハ八幡の御
妹清水といふされの姫とかん事なり
治の比時新宮よりましくて八とこ
ひとおりて、それら摩耶乃明神とも
つまよりあかて此むをかしく社ひろみ
ちひのむよりしまの神新宮に居れも
くす会くどこの氏せ乃つゐひとつるよ
むされの宮とも姫ともつけ盛し。此む
されの姫の信仰ふ仍ハ九引るものよ

ほくばく筑後の出よりて此はその神
は古今も信仰ふ色ともし海のみ事く

新古　いかにかのうるしもにうら藤の
塩干塩らつこりまうり　為家

うづ島　七彦衛

○うづ島とふけで古くハ出雲の国子と号福来
号とて其の名をもくての号とに出
子よりおもむろおりてらの号とぞ二人ある。
清見おもむろの号ハよく物なしけふ。
神にハ山将のちをてらるとあり時見すれよ

ゆくりてくん。南田もなき所がくに浮浪へかり
ちりてやんとてやすへ。見ての船とりもて。舟
しぞハ糟をし結ておりし時出船許り
乃そる。帆とりして。杓針を魚ならば結
ひて。見よりくる艀とりひて。今の針を
多くかゝり魚ほどわれば。さぞめ兆まで家
くそくとあるし。ゆへやんくくなきに。おとすう
浦く立出て釣する塩士来て戸やう
おもふ乃りてはべくなきしも。船出節月
よ。浦かはつと云ふ。其時よりおもふ乃りて。

然はゆきしかは然宮神の姫君玉姫と
契りて鶴と亀はつかひて夫婦が中に
て居たりしかは鶴はこなたへ来り
乃りてかくて氏神家の鶴は見えし
されば竹のたまは鶴を乃ゆるしての姫は鶴をゆるして
玉姫の作ふたりまへにけりさん源こそ
居をはなれて来しも鶴の羽かくれ
行て乃ゆふにてたちよりけり
其内に豊玉姫かみて子を生かかり
ゆづりかはよりみ鶴の羽まくらと云

など略してかくり。其うぶ風にやれ侍ふ也
又きわハ物ごとのきるくやうく。七言の縁の
てにをハし七夜くよ頌をもし。早要
又よ七言とふ後の手本をのしらせく。
縁よして吟の七夜くよ用あき

君が代ハ七言の縁句くすまし
いくふ心にあくまで見えやれ侍

俊成

袖中抄第三目録　宗祇撰

名所讀合の事
難議乃詞
賦乃書様
賦の取様

早稲田大學圖書

紗中抄 巻三

名所讀合の歌

○難波めくらはやしれぬ乃とくなきまゞし
ちくよ難波つけぐし

難波めぐりまかり戎神よ
目もくれかる神の風ゝも

○難波菖中よらば告ればかべし

伊勢緑のもみまゝるとは難波
河よおそくうるふみそゆし

ゆくだ山よどこ乃の浦つけるし 浦は山崎く

せきのうちかくつゝこそ錦なりけし

入相の鐘とつくれ山風よ

ともに打乃跡や花のちる雲

○あのくにすまし侍りまゝ。淀川の末ながれの

こゝろもいひやくさゆるつけでし車のこゝろとは水

瀬の流乃ことく

○雲乃こゝろとおもふなどくハ雲の姿なりと

いひつく宇治よき雲乃こゝろをつけでしまとは水

色のつまかはる時つけでし

苗ぐら雲に流ハちる様も

霞よこのゆる宇治の柴船

○流のこゝろを打たし

山風もさへく嵐の雲のそと

立田の里は秋のこゝろ

○竹の都。伊宮のこゝろとかめのりを竹乃

都につけでし

○よろひのゑ まなめ打とと なまめた男

同じこゝろと男 背打とと かつま男

○書浦の里とハ里のなゑまつるとハ浦

様とらの里なり。伊里の山代。様山とらるべき。

いつく嶋のほとりにあるは此嶋のさとゝいへ。
海ありて此浦と嶋のほとりとゝく又松原ある
嶋の宮ありて是にむかしまつのうへは宮しと
なつけて此里にはいろ／＼とれるをば此宮を申ん
○須川とゆふは此浦にてゆへしば於かは
乃唐人を志らへてなかとあり往古は湊と
なりて此川の中ほとにあるを於はりかくされ
おりひく須浦とふるは於りひのみを付る
此世中く須川をもくまつのなまへば形と
まれば名所くなるそすこしへ志らへ

○須浦乃宮とありては是は浦氏のもとへまいりて
宮にとりかゝりて旅の宮まゐらせしに是は背
松浦作の往所は里の名にし宮となりしや。
須浦の宮とて里ありて須浦に宮つくる
これは是なりけり宮の里となつけまし

唐の舟よりしばしはなれいかましく
須浦の宮氏山川のそら　須浦作

○嵐山よりあれのさくらつりてぞ是にはむかし
うつりのみんの風時より往のさくらをとゝめたる。
あらし山までつく松杉ひろくなお後くさなれば。

あし乃わかばよし梅の花くぞ花枝つくしも。
つくしく
嵐山よし桜の花比良のまへて　二条殿
○常盤乃里ハ嵐山のあたり。都よりさがとも
つけべし
○おぼろの清水ぞ大原のうちに。おぼろ乃月とつけべ
しかるべし
○清乃宮。浮橋のかけはし。二見の浦つけべし。
難波みくまのゝくまのぞすま浦のすゞりの音。
いかさまにも若合べし

○ふるさとは山。九重のあたりぞ。古さとの紅葉し
わしられ家の家数も白河の
ふるくさまてあるまじき也
此歌はむかしのひがんの雪に。白河とは吉田乃
東との山ぞふるさと山ともいふ。白河まぞの歌く。
白河三条の東ぞ。吉田東よし川。都の東白川ひがん
乃東よし川ぞ。ぞれもかなしく
○紅葉川。久佐くむ都中。あきぞ。嵐山の紅葉也
○若の浦。明石の浦ぞ。須磨の浦ぞとも。ぞ与える
ふるさとの浪も。おなじ

○霞にハかくれハみえず春なから霞めるハたちものゝはて
春なから霞ハ立けれどもみえぬ國ハ雲霞乃
ふかし
○うぐひすのなきまとハ若葉縁川の上に飛べし
○柳の糸ハみどりの霞とも春寒くも一句へし
○菊のたちをもて柳のいとにつけぐし出る前と
一句ゝ菊の歌に柳のいとゝゆき
○芦刈乃里。能登もあるがことばのあやも
あるこ
○えぞ海ハ淡路にあり播磨にハ所ハ何にても付合べし

○あはぢの浦淡路にある所はしほしほ淡路の
さくひなき淡路をさしてみえつへし
○里のあまは此あたりのことが見えて藻塩をも
ど見るべし
里の海もけふもやまぬ君
万葉
おきつりの舟ゆきかふも見ゆ
浦風にたなびききけり里の海の
旧
そらくはれたる心につきて
○水鳥の鳴きてとりつきもどりてもさわがしの沖の
浦人

○水邊の時雨は湊しぐれ沖のしぐれ
しほかぜよそふし時雨浦の時雨なども
しほくもりなどにてもよろしく
○浦乃嵐のことは海よりふく歌あしき歌の
ならし礒山のあらしなど二ツともなし
○禊のことはゆふしてとの瀬とも[illegible]
ぞしるべし
○すゞかの関はおちず日向の名所
みちのく関の関もあるなり
おりひとつ絶ぬとも[illegible]

○ちるの関つらし日向の名所也ならの
香の氏つまゝならる時也べし礒山也
吉山より打ひらきれはさもあらんて
ちるの関と尋ねし歌あり
○ゆらちぶちは切らぬ大和の名所也
○うぐひすの関は山也
○かげろふの小野は丹波の名所也
○あさくらの小野は山也
○あまの河は河内と大和の境也
○みそのへの小野はうぢよる名所也

○十市のさとゞちかく
○乃ち瀬の山とおなじ山ともいふ。若狭の國也
○村雲の里。丹後の國也
○よさ山の里。尾張也。なまつけざし
○目うしのさと。異名も云。大和也。吉野郡
○宮の森。はゞつ太陽の事
○ちそしこの里。ちかく
○椎の森。やましろ也
○はゝぞ森。山の異名あれどもいつくの山ともしれねば
名所也

○丹後の天氏ともいへど伊勢外宮の事也。出雲の
そうけ給ひて天照大神の御子の内也。
伊勢とは勧請して神のみなとすとかく
しるべし。外宮とは天照の文殊也
灯おがむ。伊勢の神明の御ためにし。常
世の外とぞいへるそうるをば斯く光外宮
よる灯ともしつ移しう
○暁とは暁の寝衣緒の絹かくかくし。
されば本歌にもかく月夜なかつかなくれとよ
めるタノ月は暁の氣色付物すればなかつ

ちよくしふにハ二見のうらのよみ歌有る。
中将大和の歌ハこころへし
又月夜おもしろしといふ歌
二見の浦にわけて入られ
むかし二見の浦のあはれきく
今案
拾遺よ 川そうる木氏村こし 備卿
○若葉山とハ吉田山の名なく稲荷そハ
ちりしほる乃をかのよ ひのへし
○常陸のうみのかたへしてかへるはいせの
のこされんかんゆるたゞ新ちんかけるかけ。

常陸ハ武士のそなへるまたのかそとも
たかき
万葉
常陸なる浪逆の海の
りしまへものそでこそあらけ
○さのはるかくてうつけたしさいの歌
生馬ものみつひ年よめるうた
西行ちりふさみしくさら
○こしまの伊豆のこ鍋也
○こしま伊豆のあくらしまは伊豆の国ものありける三鶴
乃ところもとへし

○谷はの露たるまくらにみるつけざし窓の床
月西に窓のこやり始ものぞ又さき田もかぐや
ちや作れどもぞし

○難波 明石 志賀 住吉 にほぎも 歌の名之
事もまくらなし

○神なら山といふは狩乃事之

○吉野ふる名所乃一ともいふ吉野 おしよの京
鴨川 吉根の峯 あつさ川 又よ嵯峨
まくらしのとい里ゐる所ふしのきんらいかほし。
吉野和のくちの清涼殿之

霧さめの朝の窓代名名れは
一花咲所大和もそし
あしその京まだれでもつけざし

○紅葉乃洞 多武峯之
紅織乃洞

○さつきまつはいつまでと峯乃名之又
若代ちらさ出るとも比ふ

きりつきまさる中に清音峰の
末木 霞く山よさく花さくや。 恵秀

○鶴齢にまさるへ月のよぞ代朝くる月つき朝の鶯日。

花の顔見ざればまつは朝なしでんがくまし
よしのでも思へ
○花のつまふれは桜まじりの帯やうのやうしき
とらまへ
○梅乃花同桜の花柳の花は何れも書へし
○桜の花まへ小手杉の衣花ハ千代咲く
石よりて咲で咲くも見ときつの書まじ
○ちりしの松葉おぼの松葉菊の松葉まへ
○いまいの屋まへ御屋へ
○さのうとの社まへ菊のみちまへ

○花のあるしさへは書へ
○書化あるしさへは書へ
○むつかしさへは書へ桜さへても書へしても桂雛之
○さくら花草つしや
新古
永代の以まはれつ咲しより
海士のはらから火をうち初め
衣笠
内大臣
○ふるのやくへ書へ山さくらは書かすしでも宜と
思へ
○花ぐらしとは花ちらでつむりどのまへ
○山桜戸とは桜の花かうてこんと言うざしてもる迄へ

○青嵐ぞうつのあしの名く四月五月六月
乃霧ちまなべし
○山ほち花杜母く夜く文桜月様ともちう
しゅまこ名とうま草ぞ犬ゟ禅門名もろまる
四月五月の霧ちまさし
○卯月の空とぞ卯の花の雪名く今月卯月
乃花ともがし
○鶯乃音つよあれ夜もけまれば夏なくぞ是ハ
当去つね音をどうふかく
○水の花ぞら是れ夏名くぞ祢蕗ともさく（本ノコトヒ）

祢ぞ花ともが蕗乃祢ともぞ夏ちらまさく六
月まで
○夕顔の雪花のうすく六月く
○さつき麻おさの赤紫く五月く
○ちりく象ぎさつ乃夏名く六月く
○青草草夏く妻のまとく
五葉之のちるやちる秘ぞ穂まだく
卯月五月よりさつきまよ
○麦枯六月令夏の杜風ともさべし
湯守生上夏の杜風そよあまく

出木 山郭公

○二月まで鳴は山郭公のうへ時鳥のなく
　宵月夜やまだ鳴ぬ時鳥
　おりから初音の二月まで鳴

○さみだれにぬれて梶の葉も

○六やうに六月富士籠り

　さつきの

○ほ花草にハ野の花の名

　とものへ

○桔梗梶に鶴郭の七夕の衣

○まつりの糸ハ梶の葉に七夕にかしづくの糸
なども用ゆべし

○あさがほの花ハ牽牛七夕の雅名にてかれの外
しき物七夕にしき物に

○庭のしも梶に七月の庭に盥おきて七月
七日乃星葉に露の玉とも

乃糸つけべし

○梶葉のうら梶に七夕にて天川のうつし筆
水面にうつる星

やや海のうつる

○かさゝぎのはしは天の川のかくる鵲の羽を
きたりしと云ども鵲まくらに書きて云字なり
○かさゝだとりむくゝ七夕のよりあはせ夜鴨
つばさのもしは七夕はつけべし鵲の
翅のしるし
○きぬぎぬの糸はやはり七夕の后とよくおもはるゝ
よきね願いとおもはるゝ先は七夕
○草枕ほか七夕のまつうへ七夕のお十夜
まくらつけべしまた天川つけべし
○かげのとつさほか七夕の前かくして梶の

枝をかく
○うつくし七夕のたらへほかまくらたとへ
○梅桜柳をまもりてつゞる跡ほか
○山姥のうたは宇治の里に住みし島よもす 本ノ下ニ
竹まくらゐとつけべし ちかづくはかく
宇治の山は住みはかうつくし涼船
乃粉は涼舟の書へ涼氏の名をかく。
宇治の橋は小船は付よ
○月の海やまて月の明暮出入のかく
○月の船もちまうし七夕はつけ置し

○二季のなかうちは秋へまぜを嫌べからず

○朧とは霞のうへにみえていふべし
まことの秋とも朧とはいふべし

○あいそひしくは秋へ

○月の秋は文月まではなるべし

○紅葉むしろは紅葉のちりしきたるをいふべし

○虫すだくとはおのおの寄て鳴なり

○浅き草とは霜草のことなり秋百日のうちに
ときは花ちりしく又そぞろに咲ものなし
色を百草といふべし

浅き草花の心やうつる年
さればとも無神のやどれ

○中ころおちの秋くさしは当年よりはるかに花咲べし

○さみだれは五月のさみだれとて秋のさみだれとも
さみだれともいふべし

○いさゝめとは時の名残なるべし

イサヽメ 只暫　イサメ 早目

○雪津神とは雪をちらす神とて立冬の頃
正月のころなり

○雪の松とは雪の夜の緑の名なるべし

○霜の滝とかくる池の中に生まるゝものの名なるべし

池の濁れ亀とも見ぐるしぬすびとも成べし
○いろこ帯とらせのうつしき時まうちうの帯
ゆうとちうもちつしけつるよりけべし
○むさしの座は九月の御祭のよく
○むの素王の水まうくも
○おもの座は九月の此事は花のうへちぶじやんに
白まうけべし
○梅の鳴枝は九月の主んの枝く
○こけしの衣は君のめでたく
○むの花は九月く雲のち氏の菊は九月のちやの菊と

○おもの神月衣は君の御衣く
○衣の君のめでた衣はむかしちかうきく
○未来の秋九月の夢見く
○来明の花の後に月廿三日の夜く
○おもしろ衣しら大くちまいへんの事くおく
おもしろ衣まできて見くらしておなちょう
乃ちの文紙うけてよみよく
○手向草は年のかはりに月つぎく
○あつらへ草は先も万事をさくまづらせちの人
乃ちちぎらりよく

○東の書生にはあづまめいばれば東女のこゑのく
○河内女とハいは河内国に住まれ女く
○笈かけしとあらば笈のさむらひとつく
○若菜のうらをえし定て宇治をつけべし
○須磨の海とあらば秋の月をうつしまさにあはれの実つけべし
○いつまで草とは草の子なる草也 蔦の内ちがく ひるよつけべし
○りんの葉もあまもとは風車とりく花とも云いばれどもきくや

○寺つゝきは鳥の名也
○てくれは草の名也
○九重山又都山ともいふ
○信山は大内のこと信心によきぞふとても也
○あさひきては朝日の事 夕日にはあり
○山の神は山のをさめなる事也 山もりの神とも申べし
○やそ乃神は雲の上のたるることをいふ
○神乃緒は神のたしとつくべし
○神のなひの名神代見とも云 あめの安合

○男と云ハ女ハ洞くハ是の女と男をいふなり
まくらにて出像へし
○雲ぢにかれ女とは洞くへし
雲ぢにかれ女をもゆくかたのしられ
三笠の山路にかよひても
○折ひ川と云事洞のことくへし
おりひ川[illegible]なとのしれ[illegible]の
ところ人をあつて消ゆる
○雲路をたて男出像也其を移人ハ雲水なり
男をたつねて僧になるといへば

○そぞろ人文章をのとくかきそれ時こと
文へし
○ここち人心のさしまわれくかの事をもよ
○つくもすまもすへげまでも女の事なれく
○夢のうきよと心のうちよなきに
夜もすがら枕のうへし 洞川
おもかげハうきよ夢のよき[illegible]
○東歌みへにちの此めがおつ時にてよ[illegible]
○ちはやのこやたまそゆきて家く賤が住まと
寄合へし

東路のちに花とやのしやく
或は南さり秋草のみをは（前句のかゝり）
○山ざとは山のおもぶくつくりてよろしく
○柳のかづらも花柳ともおぼし柳は春の
ごとくに花咲べし
○柳はちらずむしろとさへつくれば春にはなむ
しかるは秋く柳ちりようつくらむと思ふに似
せざると
○雲の雅称なるとく浮子につけべし
○ほどのえめくる心そがら花みづまてくみて

○そうとふるにこが孫をつゞみて帝まうくかどを
ども付ぞに店宮にまへて家をして絹と
作りて此むすめに帝に出して物ぞのと
いふが故侍帝に作りにぞしのちはこが孫と
はやくおもしろき情の女んずて親の
取ておちて出すしまうして云ひけるは人のされ
さるごが孫まそしかしたにとしてどうして
出ありをいとてなのこゝろそこをちらさるの
ゆつく
○夕ぐれさは夕などの物おもひ心のうごくよう

○こともえこゝねハ雨によるすくやめづらしれ。事く

○かゝれ時ハおりつれのやとるらて

○まろ風ハ都そうぶやゝの事し

○おそしの風よるつきら坊のことく

○さつまそくとハさらだちすくるすく

○さんとかぐるまよとへぞゝ物ろひおそゝこそとぶぐるとく

没梭間（サラナグルヽ）暫時ノ義ト云

○ひとよとろむしおとゝろ鬼氏るすくひとよとるん

みゝくびろつがりしるかりのく

○中くぢまりかゝと云心し

○ちとやふつとハさぐくちゝろつとをと云心し

○ころびとはちまさけ乃ごとく

○われめうんとはけうきわかんのごとく

○ちすげの谷さけとは堂ちさけのごとく

○まおちまねとは泳ちまね心し

○砂んとつくるとは月花谷ま心と付るごとく

○雪のうちとは岩のうとだれゝるのゝめく

○胡むるとは鶴のごとく麁をしれて本ふ

荘るく

秋下　十

山路ハ嫐まる花を去して
かゝるも落ハ守くと就る
○ゐるを乃く曲のまろすミさすとゝ物なし
○すれりとハなんぢと不心くまくこれのとゐ
こゝろく
○羽ちやむゆきつれたるてとく
○碧より人を見るとハ暮くてさまざろしのや
うゝのおつゝ物をごろくとうゝく
○京あるとハ夜する乃こゝや
○くきられとハ色このゝの罵くおそられやとハ色

好ミの女く
○山のかさとハ山の横たく
○わりのこゝとハわりのくそゝるすく
○月の志ろ衣とハゆきびゝのるすく
○うらゝとハ百々方おくとゐ心く
○志うお米乃神路衣ハいづれも色のるすく
○志つうまてかとハさまてゞうかと云心く
○此へとうまのをハとハかゝろのをのとゞろく
○あきしの風とハ西風やまくごろあへくをせも。
日前く

祝

ゐ俤む都まて寄されハ
あまりの風よりより村雲
○歌のせしろとハ。歌のさたしや
○弓をひくむハまてあそふてくりたまへよう
花のゆきもぞちるひいまた
見えれいふ生弓君の子様る
○めくられのいまする御し
○其帰とは大舞舎のことく君の代位よ
つきせぬ時のなれ
玉津宮やた代明ゆたしらの

松の御歌の秀かそ慕しき
○梅の香さし物とは梅花香のかく
○さくすし筒とハつへのうし弦筒のことく
○こよそ花物とおもふてくは此の言葉
○うそもつもてくちまで。つ役くやげんのことく
○とうけしやうじ夕白の宿代とられたる御事
弥勒仏とかすへくうくと御代
うらそく形こちまふ座をまつて
こんよもふうれ契くしまさ
○うとうの気とらふて。白のをともしろ時ほか

玉はたゞきよらなるをいふ也ひとへ物なりと知るべし。
それをからころもといへるなり
○海士のまくてふものとは塩焼衣を着て摘る
一所なるべし
　手なる伊勢の海士の風さへ寒よ
　摘まるゝ袖ぞ見え殊にや
○よくも焼とゆふ難波の浦に苫しの根を
わかれてぞとくるとも也
　難波女の思くもなく衣の下紐
　とくつれなき君に身なりけり

○この歌の心はなそらへしらるゝごとく
　秋立ていく日もあらぬ此寝ぬる
　あさけの風は袂寒しも
○いまだうつろの形とはみんぞいのちなるべく
○いまそとはみんの魂なるべし
○めぐりくるとは生類にあらば十二時のう
たりとす
○おりまとは秋野の陰んしく欄干とすべし
○もろともにおぼえたりたるのみ
○九の段は唐にては九段として多の竹とするなり

○九の名寄金く
○おとなるのうよぽおもうしねへ
○ろかと笛うよぱぶくらそのれめきるを
ことぶけ申うくもれなひの名の
きそらん富成いそくちらむ
と紀とむう絶へ洞よ拵きそく
弟ハうき桶とうやされうまる

賦の書様
○ろく海しぽ初様の当絶すへ

賦

○年歳たてとのころまひの当絶すへ

賦
○陣場門かの時の当絶すへ

賦

同取様
○一字露見　二字音　三字中略
四字上下略

文明十二年霜月廿六日　宗祇在判

延寶六戊午年
五月仲旬
深江屋
太郎兵衛板行